



森のちやれんがニュース

2023 秋

Newsletter vol.33



第9回特別展 ユネスコ世界遺産登録記念 「北の縄文世界と国宝」開催(2023年7月22日～10月1日)

2021年、「北海道・北東北の縄文遺跡群」がユネスコ世界遺産に登録され、国内外から注目が集まっています。本展では、「北の縄文世界」を中心に、国宝8件28点、国指定重要文化財38点を含む約480点を公開し、世界に認められた「北海道・北東北の縄文遺跡群」の価値や世界遺産とは何かを紹介しました。

見事に形づくられた土偶や岩偶、土器からは、縄文文化の人々の「心や美」を体感することができました。また、世界遺産の構成資産17遺跡と関連資産

2遺跡の貴重な資料が一堂に会した風景は迫力があり、多くの来館者を圧倒しました。さらに、これらの遺跡群を支えた、縄文文化を活かす取り組みに関わる“人”に焦点をあて、その活動を紹介しました。

サンエックス株式会社の人気キャラクター、ころころコロニヤが「名誉学芸ニヤン(員)」に就任し、たくさん応援してくれたことで、子どもから大人まで、より一層縄文文化を楽しめる展示会となりました。

(学芸主査 圓谷昂史)

CONTENTS

- ② 博物館活動紹介
博物館における温湿度管理
- ③ 総合展示資料紹介・第5テーマ
死体と糞が主役!?「生き物たちの北海道」
- ④ 研究活動紹介
わたくしの研究活動は?
- はっけん広場
⑥ はっけんイベント再開
総合展示室
「触れる展示」を再開します!
- ⑦ アイヌ民族文化研究センターだより
「第16回アイヌ文化巡回展 in 奥尻町」など
- ⑧ 活動ダイアリー
2023年6月～2023年8月の記録



博物館活動紹介

博物館における温湿度管理

高橋 佳久

研究部博物館研究グループ 学芸員

博物館における温湿度管理の重要性

北海道博物館では、現在18万件以上の博物館資料を所蔵しています。これらを長期にわたり保存・活用していくことは当館の重要な使命の一つです。そのために収蔵庫や展示室などの博物館資料が置かれている空間の温湿度を、一定の範囲に収まるように制御しています。なぜこのようなことが必要かといいますと、図1に示すように、博物館資料は温湿度の変化によってさまざまな影響を受けるためです。

当館の空気調和設備を含めた施設等の管理は、北海道立総合博物館条例に従って指定管理者によってなされています。月に一度、収蔵庫や展示室の温湿度の変化や問題点などを関係者間で話し合う会議を開催して、情報共有と安定した温湿度管理に努めています。

そこで今回は、当館で温湿度管理に重要な役割を果たしているさまざまな温湿度測定機器についてご紹介します。

温湿度測定機器の種類と特徴

人が快適に生活するためには、季節に応じて温度と湿度（主に相対湿度）を制御する必要があります。そのため、皆さんのご家庭でも温湿度測定機器を設置して日常的に温湿度をチェックしているのではないのでしょうか。多くの博物館資料にとって快適な環境は人の場合とほとんど同じで、温度はおよそ20℃前後、相対湿度は材質によって若

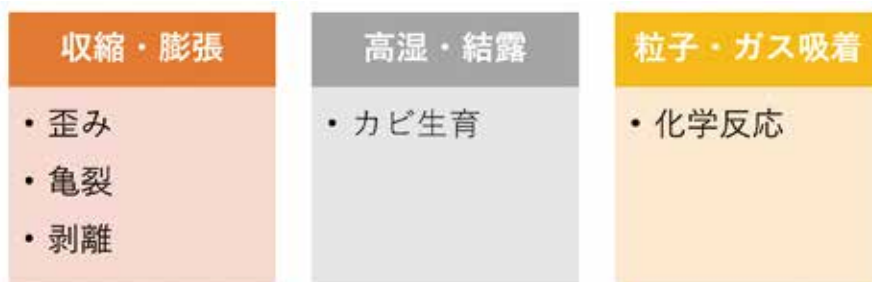


図1 温湿度変化に伴う博物館資料への影響

干異なりますがおよそ50～60%くらいが目安となっています。ご家庭と同様に、当館でも温湿度測定機器を使って上記の範囲から大きく逸脱していないかどうかを監視しています。当館で活躍中の温湿度測定機器を写真1に示します。大きく分けてアナログ式とデジタル式の2つの方式があり、デジタル式の中には測定した温湿度の値を本体に保存する機能を持つデータロガーがあります。アナログ式は特に動力を必要としませんが、デジタル式は乾電池による電力を必要とするため、電池切れには注意する必要があります（データロガーに保存したデータが消えてしまうことがあります）。温湿度測定機器の測定精度は、測定原理によって異なるだけでなく、経年使用によって変化することがあります。そのため、常温では測定精度の高いアスマン式通風乾湿球湿度計（写真2）を用いて測定値の誤差を評価し、機器の較正（くらべて正すこと）を行っています。

人の肌感覚も頼れるセンサー

温湿度測定機器以外に、人の肌感覚によってもある程度温湿度を評価することができます。「暑い」「寒い」の感覚はもとより、「今日は雨が降っていてジメジメしているなあ」とか「暖房が強くてここにいると喉が渇くなあ」というような感覚です。開館日は毎日学芸員が収蔵庫を巡回していますが、この肌感覚がなければ何らかの異常に気付けないことがあるかもしれません。そのため、巡回時の記録日誌には、温度や湿度の値だけでなく、担当者のその日の気付きなども併せて書き留めるようにしています。

このように、測定機器と人の肌感覚の両方をうまく使って、博物館内の保存環境の維持に努めています。



写真1 館内のさまざまな温湿度測定機器

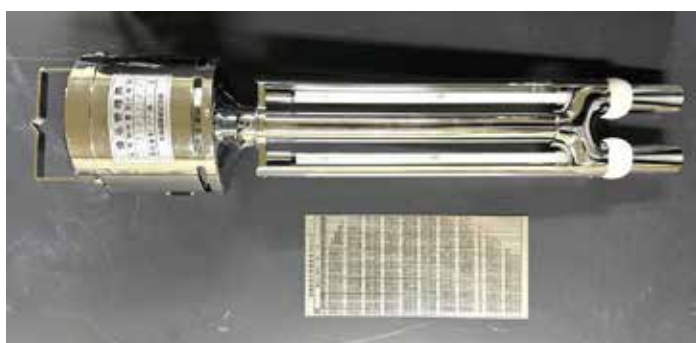


写真2 アスマン式通風乾湿球湿度計

総合展示資料紹介・第5テーマ

死体と糞が主役!? 「生き物たちの北海道」

堀 繁 久
自然研究グループ 学芸員

第5テーマの「生き物たちの北海道」は、北海道に生息する生き物の視点で、生き物のつながりを見ることができません。生態系というのは生産者、消費者、分解者がそれぞれ有機的につながりあってできています。日本の多くの博物館であまりクローズアップされていない、動物の死体と糞が多く展示された特殊な自然史展示と言えるかもしれません。リアルな排泄物としては、ヒグマ、エゾシカ、ユキウサギ、クマゲラの糞とフクロウのペリットの实物標本を展示しています。糞の標本は、学芸員の手作りで乾燥させた糞をキガタメールという樹脂で固めてあります。

展示場にある死体は、森林エリアでは、エゾシカの死体が横たわっており、その下を覗くことができます。足を持ち上げて覗いてみると、エゾシカの死体に集まる昆虫たちが見れます。動物の死体は自然界の中で最も栄養豊富な資源の一つで、多くの生き物の糧になっています。そこに集まっているのはカバイロヒラタシテムシ、センチコガネ、クロマルエンマコガネ、そしてアイヌコブスジコガネです。実際に洞爺湖中島でエゾシカ死体に集まっていた昆虫を採集して展示しています。死体の分解過程で最後に残るのは骨と体毛なのですが、アイヌコブスジコガネの幼虫はその毛を好んで食べます。



ドングリの殻がいっぱい入っているヒグマの糞

河川エリアでは、川に産卵のために遡上したサケが力尽きてホッチャレとなって、河畔に死体として上がった状況をリアルに再現しています。

このホッチャレは頭部のみ固定されていて、尾部は持ち上げて下を覗くことができます。子どもたちが何度も上げ下げしても壊れないように、丈夫なウエットスーツの素材をベースに頑丈に作成されており、8年以上経過していますが、今のところ破損せずに稼働しています。ホッチャレをめくって覗いてみると、この展示を作るために胆振管内の河川でホッチャレの死体の下を撮影した動き回る大量の蠅の幼虫、つ

まりうごめくウジの映像を見ることができるようになっています。

海辺エリアでは砂浜に打ちあがったネズミイルカの死体にカラスとウミネコがついばんでいるシーンが再現されています。良く見るとイルカの目が食べられ無くなっているのがわかります。

キモイとか言わずに、好奇心をもってこの死体と糞がいっぱいの「北海道の生き物たち」を是非見に来てください!!



エゾシカの死体に集まる昆虫



ホッチャレ（鮭の死体）をめくると…

研究活動紹介

わたくしの研究活動は？

佐々木 利和

アイヌ民族文化研究センター 非常勤研究職員



1948年、北海道生まれ。久保寺逸彦先生に師事、アイヌ語・アイヌ文化を学ぶ。東京国立博物館に長く勤務。その後、文化庁、国立民族学博物館、北海道大学アイヌ先住民・研究センターに勤務。博士（文学）、東京国立博物館名誉館員。

今年度、早々のことです。わたくしの住んでいる自治体から後期高齢者に認定する旨の通知がきました。となると…ですね。

はやりのことばを使うと、その前に終活という、ことになります。わたくしのこれまでの仕事についての締めを心がける時期の到来と考えねばなりません。とはいえ後期高齢者にとってはなかなか難しいことではあります。

わたくしは「アイヌ絵」という資料群を核に、アイヌ史・アイヌ文化を学んできました。

「アイヌ絵」というのは、アイヌ民族の文化や風俗を描いた絵画作品群のことで、描かれた時期はおおむね18世紀から19世紀前半ころまでといいと思います。が、もちろん、それ以前の画例も含まれます。そして描いたのはすべてシャモ（和人）。

なぜアイヌの人びとはみずからの文化や風俗を描かなかったのでしょうか。それはその宗教意識とも深くかわってきます。アイヌの人びとには、描いたものがやがて悪霊となって祟りをなすという考えがあったといわれています。ですからみずから筆を執るということをしませんでした。

「アイヌ絵」はすべてシャモ目線で描かれています。シャモ目線でみるアイヌ文化は劣るもの、野卑なものといった感覚がほとんどといっていいでしょう。ですから現在のアイヌの人び

との中には「見るのは嫌だ」「気持ち悪い」といった感想をもたれる方が少なくありません。いってみれば差別感にあふれた「不快画」でもあるのです。

また、「アイヌ絵」という名称にしても学問的に定着したものではありません。「アイヌ風俗画」というひともいますが、風俗画とはその風俗を共有し

ているひとが自分たちの風俗を描いたものですから、アイヌ文化を画題としたものは風俗画の範疇にはないのです。

では、そうした「不快画」に属するものをなぜとりあげるのでしょうか。それはシャモ目線で描かれたなかに、アイヌ文化に関する貴重な描写や情報がないかをさぐり、それをアイヌ史やアイヌ文化誌の記述に寄与できないか、という思いがあるからなのです。いってみれば、シャモ目線の補正でしょうか。

そんな観点からいくつもの「アイヌ絵」をみてきましたが、結果的になにができたのだろうか、との思いから抜け出すことができません。でも、そんな分野にここまで足を踏み入れるきっかけとなった資料を紹介してみましよう。



図1 国宝『綾本著色聖徳太子絵伝』第二面・部分（東京国立博物館画像検索より）



図2 アイヌの服飾のさまざまな形態。

左端の女性が着ているのが羽毛衣、その手前の男性が着ているのが草衣。



図3 択捉島アイヌの衣服

男性が着ているのが草衣、女性が着ているのが獣皮衣

「エトロー島…風俗大古を存し人質如神、艸（キナ）を編みて服とし、鳥獸の皮を裘（ウリ）となして寒を凌ぐ」とある。いずれも『蝦夷島奇観』による。

（画像は図2、3とも佐々木・谷澤編『蝦夷島奇観』による）

それは、東京国立博物館の国宝『綾本著色聖徳太子絵伝』です。この絵は、聖徳太子の伝記を描いたもので、日本史にいう平安時代、延久元（1069）年撰津（今の大阪府）の絵師である秦致貞の作品です（全10面）。太子絵伝としては、現存最古のものとなります。したがって、中に描かれた蝦夷もまた現存最古のものです（図1）。

この絵伝のもととなった『聖徳太子伝暦』に、敏達天皇十（581?）年、聖徳太子が十歳のときのことで、蝦夷が辺境に兵をあげました。天皇はどう対応するかをの会議をひらきますが、群臣たちは討伐の議論ばかりです。天皇は、かたわらに侍していた太子に意見をききます。太子は蜂起のおさ呼んで諭すべきだと進言します。そして呼ばれた、おさのアヤカスたちは大和の三諸山にむかい、初瀬川の水で口をそそぎながら未来永劫の忠節を誓います、という記事があります（これは『日本書紀』に拠っています）。

この蝦夷たちを諭しているのがこの絵です。第2面の左上部にあります。聖徳太子とその従者たち。そして三人の蝦夷が描かれています。絵の具の剥落が多く、細部の描写はわかりません。

ここではもっともわかりやすいふたりをえらびました。男性らしき人物が描かれています。上半身は裸のようです。左側の蝦夷は鳥羽の腰裳をつけ、右側の蝦夷は腰裳をつけています。そして容貌はふたりとも髷髪で、ぎょろ眼、ヒゲはありません。周囲の使者たちとは異なる異様な容貌です。また手を合掌のように組み、立膝に胡坐、はだし……など、明らかに異文化びととして描かれています。

これが現在に伝わる最古の蝦夷のすがたです。もちろん秦致貞は実際にこの人びとをみたわけではなく、おそらく伝聞にもとづいての描写だと思われます。なぜこのような描写がなされたのでしょうか。わたくしは仏敵である邪鬼（四天王に踏まれている鬼たちがいい例です）を意識したもの、と考えています。このなかで腰裳に用いられた素材は18世紀のアイヌ文化にも認めることができます（図2、3）。

この最古の蝦夷像に関してはわたくしが昭和47（1972）年に報告したものの以外には論じられたものはないようです。理由として細部の描写がよくわからないことに加えて、やはり鑑賞の対象となる作品ではないことなどがあげ

られます。かかる作品・不快画をなぜ取り上げたのかというご批判はあるでしょうが、やはりシャモの蝦夷認識の早い例として無視することはできません。

アイヌ絵に関心をもっている若い世代がでてきて、アイヌ史を記述する立場でシャモ目線の不具合を指摘し論ずる、本当の意味での史料とし、アイヌ史の叙述に寄与できるのではないか、との思い。残念ですがいまだそうした出会いはありません。

はっけん広場

はっけんイベント再開

コロナ対策で長く閉室していた「はっけん広場」がついに再開しました。広場のキット（遊具など）はいつでも使えますが、4月からイベントも土曜、日曜、祝日のみ開催することになりました。久しぶりで、私たちも頑張って準備しています。再開初のイベントは「飛ぶフクロウをつくろう」でした。簡単なつくりですが、うまく空気の流

れをつかむと長く飛びます。こどももおとなも、歓声をあげてとぼしていました。色を塗るのも、それぞれセンスが違い、カラフルなフクロウたちが飛び交っていました。

6月後半からは「七夕カードをつくろう」というイベントになりました。こどもたちの願いは、様々で見ている私たちも楽しくなりました。各家庭で

七夕の行事をしなくなった今、机の上に飾ってくれていたらうれしいです。

8月からは、「くるくるピクチャー大作戦縄文編」をしています。これからも、いろいろなイベントを用意していますので、展示室を見たら「はっけん広場」にも立ち寄ってくださいね。

(解説員 福島奈緒子)



つくってるつくってる



どんなお願いを書いたの？

総合展示室

「触れる展示」を再開しています！

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、長らく使用を中止していた総合展示室内の「触れる展示」ですが、2023年3月より、段階的な再開を始めました。一部、休止中の展示も残って

いますが、展示室内各所に散らばる「多言語ボード」や「めくり式展示」、第1テーマの「触れる化石」や第5テーマの「どんぐりコロコロ」などが再開されました。また、5つのテーマの入口

には手指の消毒液も設置していますので、北海道博物館へお越しの際は、ぜひ「触れる展示」をお楽しみください！

(博物館基盤グループ

学芸員 石子智康・亀丸由紀子)



①多言語ボード（日本語・英語・中国語〔簡・繁〕・韓国語・ロシア語の言語で展示を解説しています）



②触れる化石（ヒゲクジラとステラータイカイギュウの肋骨をもって重さを比べてみよう！）



③めくり式展示（展示室内各所に設置されています。探してみてください！）



④どんぐりコロコロ（ハンドルを回してどんぐりボールを転がし、生き物のつながりを体験しよう！）

アイヌ民族文化研究センターだより

奥尻町で同時開催！ 「第16回アイヌ文化巡回展 in 奥尻町」 「北海道博物館総合研究プロジェクト」成果報告展

1 アイヌ文化巡回展

当センターが、毎年道内各地で開催している「アイヌ文化巡回展」。今回は、アイヌ文化巡回展初めての開催となる奥尻町にて、当センターが所蔵するアイヌ語地名研究の第一人者である故山田秀三(1899～1992年)が、奥尻周辺地域を調査した時の資料を紹介し

ます。山田は、奥尻町での地名調査は行わなかったものの、1961年(昭和36年)に江差町、1974年(昭和49年)に瀬棚町(現せたな町)など、この周辺地域で地名調査を行っています。その結果を地図



写真1 山田秀三による「江差町見取図」(昭和36年5月24日)

や写真を用いた手書きのノートにまとめるなど、膨大な記録を残しています。

今回の展示会は、こうした地域の調査資料を通して、アイヌ文化やアイヌ語地名の理解を深めていただく機会になればと企画いたしました。

2 総合研究プロジェクト成果報告展

北海道博物館では、2019～2023年にかけて、総合研究プロジェクト「北海道の離島における自然・歴史・文化に関する研究」と題した総合的な研究を行っております。このプロジェクトの最終にあたる今年度は、これまでの研究

成果を調査に協力してくださった方々や町民の方々に広く知っていただくため、パネル展を開催することにしました。

この展示会では、自然史、民俗、アイヌ民具、建築史などを専門とするメンバーが、それぞれ5年間かけて調査を行い得られた研究成果を紹

介します。奥尻島の自然や歴史、文化について改めて考えてもらう機会になれば幸いです。

この「アイヌ文化巡回展」と「総合研究プロジェクト成果報告展」の二つの展示会は、北海道博物館と奥尻町教育委員会の共催事業として開催します。

【展示会の情報】

■第16回「アイヌ文化巡回展 in 奥尻町」

■総合研究プロジェクト「北海道の離島における自然・歴史・文化に関する研究」成果報告展

<会期>

2023年(令和5年)10月1日(日)

～10月22日(日)

<開催曜日・時間>

火～金：9:00～21:00/

土・日・祝：9:00～17:00

<休み>

月曜日、10/10(火)

<会場>

奥尻町海洋研修センター(1階 多目的ホール、奥尻郡奥尻町奥尻314)

(アイヌ民族文化研究センター
学芸員 亀丸由紀子)



写真2 研究プロジェクトでの調査の様子(奥尻沖をのぞむ)

活動ダイアリー

2023年6月～2023年8月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

6月3日(土)

■連続講座「アイヌ語ブロックでアイヌ語を学ぼう③」を開催。講師：吉川佳見

6月4日(日)

■チャレンジワークショップ「北海道の林業と建築の道具—スケッチをしてみよう！」を開催。講師：青柳かつら・鈴木明世

6月11日(日)

■ミュージアムカレッジ「北海道博物館の『建物』の魅力」を開催。講師：鈴木明世

6月16日(金)

■総合展示クローズアップ展示、第1テーマを展示入替(8月10日まで展示)。

①『蝦夷島奇観』をさぐる—当館所蔵の模写から—(前期) 写真1

②新選組永倉新八の養父 松前藩医杉村介庵 写真2

6月17日(土)

■連続講座「チャレンジが古文書クラブ③」を開催。世話人：三浦泰之・東俊佑

6月24日(土)・6月25日(日)

■特別イベント「北海道ジオパークまつり2023」を開催。写真3 担当：道内ジオパーク関係者

7月1日(土)

■連続講座「アイヌ語ブロックでアイヌ語を学ぼう④」を開催。講師：吉川佳見

7月8日(土)

■連続講座「チャレンジが古文書クラブ④」を開催。世話人：三浦泰之・東俊佑

7月9日(日)

■ミュージアムカレッジ「じっくり聴こう！アイヌの音楽 合唱のいろいろ」を開催。写真4 講師：甲地利恵

7月15日(土)

■ミュージアムカレッジ「『開拓』とアイヌ民族の土地」を開催。写真5 講師：大坂拓

7月22日(土)

■第9回特別展 ユネスコ世界遺産登録記念「北の縄文世界と国宝」をオープン。会場、特別展示室。会期、10月1日まで開催。写真7

7月23日(日)

■子どもワークショップ「小さな野球盤づくり」を開催。写真6 講師：舟山直治・尾曲香織

7月29日(土)

■連続講座「チャレンジが古文書クラブ⑤」を開催。世話人：三浦泰之・東俊佑

7月30日(日)

■子どもワークショップ「アイヌ音楽 うたって・おどって・ならして」を開催。講師：甲地利恵、スルク&トント

8月5日(土)

■特別展関連事業「縄文スイーツをつくろう！」を開催。主催：北の縄文世界と国宝展実行委員会、運営：ドニワ部

8月6日(日)

■子どもワークショップ「恐竜カイトを飛ばそう」を開催。講師：表深太・圓谷昂史・久保見幸・成田敦史

8月11日(金・祝日)

■総合展示クローズアップ展示、第1～5テーマを展示入替。



写真1



写真2

- ①『蝦夷島奇観』をさぐる—当館所蔵の模写から—(後期)
- ②「災害を伝えた絵葉書」
- ③「小樽アイヌが経験した近代」
- ④「北海道・東北北部のアイヌ語地名—山田秀三の地名研究から—」*第9回特別展関連
- ⑤「色々なわら細工」
- ⑥「高度経済成長期の発掘調査」*第9回特別展関連
- ⑦「北海道のひれあし類」*第9回特別展関連

8月12日(土)

■連続講座「チャレンジが古文書クラブ⑥」を開催。世話人：三浦泰之・東俊佑

8月19日(土)

■子どもワークショップ「バッタ・コオロギ・キリギリスをさがそう」を開催。講師：堀繁久・水島未記・表深太・自然ふれあい交流館スタッフ

■特別展関連事業 特別イベント 世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」フォーラムを開催。講師：阿部千春氏、村本周三氏(北海道縄文世界遺産推進室)、吉田力氏(函館市教育委員会)、片山弘喜氏(森町教育委員会)、澤野慶子氏(洞爺湖町教育委員会)、永谷幸人氏(伊達市教育委員会)、豊田宏良氏(千歳市教育委員会)

8月26日(土)

■特別展関連事業「おしゃれメガネをつくろう！」を開催。主催：北の縄文世界と国宝展実行委員会、運営：ドニワ部

8月27日(日)

■特別展関連事業「国宝指定記念 遠軽の黒曜石で石器づくりワークショップ」を開催。講師：瀬下直人氏(遠軽町埋蔵文化財センター)、村本周三氏(北海道縄文世界遺産推進室)、主催：北の縄文世界と国宝展実行委員会



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7

来館者数

○2023年6月～2023年8月

総合展示室 35,479人 特別展示室 17,546人 はっけん広場 2,142人

○累計(2015年4月～2023年8月)

総合展示室 766,452人 特別展示室 542,999人 はっけん広場 123,259人

森のチャレンジニュース 第33号

発行日：2023年9月30日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2023